

●横浜国立大学教授 青山 浩之

書写のすすめ

「自分の字は好きですか？」

中学生に聞きました。

●上越教育大学教授 押木 秀樹



中学生は、書写の学習についてどんなことを感じているのでしょうか。今回、三百人以上の中学生に行ったアンケートをもとに、

「新編新しい書写」編集代表の押木秀樹先生と青山浩之先生にお話を伺いました。

自分の字が好きな中学生は48%

「自分の字は好きですか？」この質問にはさまざまな回答がありました。編集部としては、自分の字が好きだという気持ちは、自己肯定感につながる大切なものであると考えています。この数字は案外高いようにも思えますが、半数以上の中学生は自分の字が「好きではない」ということでもあります。より多くの中学生に、自分の字を好きになってもらうにはどうすればよいでしょうか。

押木 文字を書くときに、お手本どおりに書くことに捉われるのではなく、自分の字をより良くしていくと取り組むこと。それが、自分の字を好きになるきっかけになると思います。
青山 そうですね。「教科書どおりの字ではないから好きではない」ではなく、自分の字の良さに気づいたり、良い方向に変わっていくことを実感したりすると、楽しさも生まれますね。

動作が整うと気持ちよく書ける

押木 中学生たちが自分の字が良くなったと実感するには、書く動作が大切だと思えます。スポーツでもフォームがだいいで、それが整うと速く走れるようになるのと同じです。良い持ち方をして、良い動きで練習をすると気持ちよく書けるようになってくる。行書を学ぶときに、そういった体験ができるとういですが、以前、青山先生が、ある動作で書くと言書らしく書いて、字形が崩れないという授業をしていました。

青山 行書化できるパターンを中学生たちと探

す授業ですね。このパターンはこの漢字に使えるよね、といったものを増やしていくって、パターンで行書を書けるようにしていったんです。

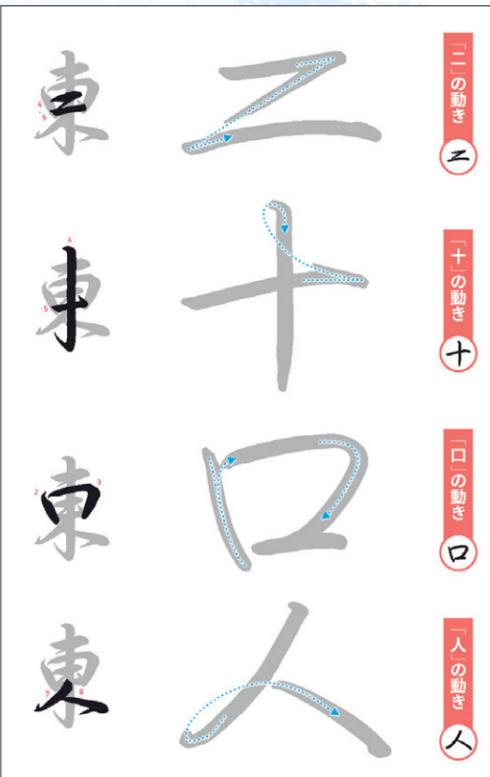
押木 私は理論面からそれを分析して、その成果を東京書籍の教科書では、「行書の四つの動き」として掲載してきました。基本パターンを習得すれば、多くの字に応用が可能で、速く書いても読みやすさを保つことができると思っています。

また、その「四つの動き」を適切な動作で示すこともだいい。先生が実演して見せるのもよいですが、デジタル教科書や二次元コードの動画コンテンツは有効なツールとなります。

青山 そうですね。動きのパターンを理解して

行書の四つの動き

教科書26ページより



運筆動画



「速く書くと自分でも読めない」

青山 今回のアンケートの中で「速く書くと自分でも読めない」という回答もありましたが、それを受けて、単純にただ行書を学べば解決するとは言いきれません。小学校の高学年で点画のつながりを学び、それを基礎にして、速く書く動作を高めていくのが行書です。小学校の楷書の学習から点画のつながりを意識化しておく必要があります。

押木 小学校低学年では点画の書き方を学び、筆順を勉強する。そして、筆順どおりに点画を書き、そのつながりを意識化していくのが小学校高学年の学習。これを行書で学ぶのが中学校。このように、学習指導要領では字の書き方を段階的に学習できるようになっています。小学校の学習は楷書が中心ですが、高学年で書く速さを使い分けることを学びます。それが中学校で学ぶ行書に生きてくるんですね。

青山 ちなみに、行書の学習には時間制限を設けるやり方があります。ゆっくり書く場合からどれだけ時間を短くしていけるかを試してみる

点画の連続

●行書では、速く滑らかな動きで書くために、点画が連続することがある。

① 筆脈の実線化 筆脈が実線になって連続する。

② 直接連続 点画の終筆と次の点画の始筆がつながる。



と、感覚が変わってくる。時間を短くしていくと速さを楽しんで書くようになり、もっと短くすると点画の連続や省略といった行書の特徴が自然に現れてくる。そうやって行書を書く手立てとなる特徴を中学生たちといっしょに探していけるとよいですね。そこから「行書っておもしろい」「書くことが楽しい」につながるかもしれない。

そうして興味を持ったところで、文字を整えて速く書くための原理・原則である「書写のかぎ」に出会う。この「書写のかぎ」を集めると、速く書いても読みやすさを保った字が書けるようになってくる。そうして、自分の字が変化することをとおもしろいと感じるようになると、字を書く意欲が湧いてくる。これこそが中学校の行書指導の目指すところかなと思います。

になって……。でも、「新編新しい書写」では、そんな中学生に合う「書写のかぎ」を設けています。小学校から系統的に考えられている「書写のかぎ」をよく知って、中学生たちと実践してほしいですね。

読みやすい文字に歴史あり

青山 動きの話でいうと、王羲之の古典の名品「蘭亭序」の中に「茂」という字があります。王羲之は「茂」の字を遠回りしながら書いてるんです。最短距離を動くのではなく、遠くを通って大きく回るんだけど、そのほうが速く、効率が良かったりする。空間もつぶれていないし、流動的に見えるし、心憎いことにバランスも取れている。そういう美しさが、書く動作の中で生まれて現代に伝わり、私たちは美しい文字の規範としているんです。中学生たちが書く



美しい文字は一つではない

押木 アンケートによると、教科書の文字を見て、そのとおりに書くことが楽しいと思う中学生も一定数いるようです。そう考えると、書写の教科書に、美しい整った文字が載っていることはありがたいですね。整った文字を見て、こういう字が書きたい、どうしたらいいんだろうというところが、「書写のかぎ」を活用してほしい。青山 書写の目的は、お手本の美しさを習得することではない。そこは徹底していくべきですね。でも、美しいものに目を奪われたり、美しいものを目指そうとしたりするのは私たち人間の本質的なものかもしれない。「書写のかぎ」を使って、多様な文字を速く整えて書くことを目指すのが第一ですが、美しいものに憧れる気持ちも否定できない。「お手本どおりに書くこ

教材文字

教科書29ページより



場合も、動作の中で文字の形が生まれるといった感覚に触れることで、速く書くことと整えて書くことの両立が可能になると考えています。それを中学生が自覚するのも、先生が意図的に伝えるのもなかなか難しいんですが、今回の教科書でいうと、「行書の四つの動き」で少し体感してもらえるかもしれません。だから、その動きをきちんと身につけたときに、「自分の字が変わった」と感じられるのではないかと思います。

また、王羲之とほぼ同じ時代のもですが、「李柏文書」では、「口」の文字がつぶれたようになっていきます。しかし、王羲之の「口」は中の空間をしっかり取っています。こうした書き方を王羲之だけが始めたというより、それまでに一定の書の進展があつて、紙もかなり普及してきた中で、書の動作性が変わり、皆が美しいと思える字が生まれてきたと考えるのが妥当ですね。……できれば、こんなことを中学生にも伝えていきたいんですけどね。

押木 「茂」の字を少し遠回りして書くのは、読みやすさのためでもあると考えられます。このように、書き方には文字文化が背景にあるというのを伝えていきたいですね。文字文化として、「王羲之」の名前を覚えなくてはいけないのではなく、そういった文字の成立過程を踏まえて、今の読みやすい字ができています。先人はいろんな工夫をしているな、というようなところを伝えていきたいですね。

青山 「おもしろいでしょ、文字って。紙が普



とが楽しい」と回答した11%の中学生にも、そうでない中学生にも、個別最適に学べる教科書であるといいですね。

押木 一方でアンケートをよく読むと、教科書の文字そっくりに書けたかどうかにこだわりすぎてしまう中学生もいるようです。一時間の学びの中の到達点を、手本どおりではないところに置いて、達成感を得られるようにすべきではないでしょうか。中学生にとって具体的にかつ段階的な、授業の達成目標。それを可能にするのが「書写のかぎ」だと思います。青山 そうですね。小学校から字を書く経験を重ねてきて、小学校で学ぶ「書写のかぎ」はある程度身につけている。中学校になると、速く書くようになって字形も乱れて、手が疲れて嫌

及したから書の動きが変わっていったんですよ」というあたりは、中学生にも興味を持ってもらえますよね。高校で選択する芸術書道への関心にもつながっていくように思います。

——昔の人もこうやって工夫したんだから、私も頑張ってみようかな、と思ってもらえらると思います。本日はありがとうございました。

押木先生・青山先生のコメント

デジタル時代とはいえ、中学生にとって手書きの機会はまだまだあります。今後もキーボード入力か、手書きかは、場面や状況により選択されるものとなるでしょう。GIGAスクール構想の進展に伴って、手書きが紙と鉛筆に限定されず、タブレットとタッチペンを活用するような時代が来るかもしれません。用具や方法が変わっても、文字を書く力を高めていくことのできる教科書でありたいと思います。

